

夢はバニラ色

「おかえり」

てっきりもう寝てしまっているかと思っていた彼はリビングのソファでクッションを抱え、ぼんやりとテレビを見ていた。

「ただいま。まだ起きていたのか」

「夕方寝ていたせいで眠れない」

「そうか」

笑いながら身を屈めてキスをする、リヴァイはすん、と鼻を鳴らし形の良い眉をひそめて不機嫌な表情になった。

「煙草臭え……」

言われてコートの袖を鼻に近づけてみると、確かにきつい煙草の匂いが移っていた。このぶんどと、シャツや髪にも染みついていることだろう。

「とりあえずそれ、脱いでこい。飯は食ってきたんだよな？」

「ああ。腹は減っていないけど……紅茶を淹れてくれないか」

言って、右手に持っていた紙箱を掲げてみせる。

帰り道、ふと甘いものが食べたくなって閉店間際のコーヒーショップで残っていたドーナツとケーキを買ってきたのだ。

「こんな時間に食べると太るぞ。もうそんなに若くねえんだし……」

日頃、エルヴィンはあまりできあいの菓子を買っで帰らない。ちよつとしたケーキ類やプリン、シュークリームといったものならすべてリヴァイが自分で作ってしまうからだ。手作りのものならば健康に悪いものが入っているおそれもないし、菓子作りはいい気晴らしになるのだという。

ぶつぶつと言いながらも、リヴァイはキッチンに湯を沸かしに行った。いつだって、彼はエルヴィンの望むたいていのことは許してくれる。その後ろ姿を愛しく思いながら、鞆を手に寝室に向かう。

脱いだコートとスーツをハンガーに掛け、空气清新機のボタンを押す。やはり、シャツやその下のインナーまで煙くなっていた。風呂に入るときに着替えばいいかと下だけ部屋着のスラックスに履き替えてリビングに戻る。

ちようど、リヴァイがローテーブルにティーカップを置いていたところだった。ソファに腰を下ろし、

紙箱を開ける。

「どっちがいい？ リヴァイ」

甘いグレーズのたっぷり掛かったリングドーナツと、スティックタイプのチーズケーキ。少し迷ってから、リヴァイはドーナツを指差した。

「飲み会、どうだったんだ？」

「ああ。久しぶりに顔を出したからね。同期のやつらからも色々かわれたよ」

リヴァイと結婚して以来、極力職場の飲み会などの席は辞してきたエルヴィンだが、今夜は入社当時が一番世話になった上司の定年祝いとあつて断ることができなかつた。リヴァイは「世話になった人の祝いなら、ちゃんとしてこい」と快く送り出してくれたのだが、エルヴィンは宴の最中気が気ではなく、どこか上の空でいた。

リヴァイは一人でちゃんと食事をしているだろうか。急に具合が悪くなつてはいやしないか。帰つたらきつともう寝てしまっているだろうな……。そんなことばかりを考えていたものだから、あまり酒の味を覚えていない。

部署を異動して以来あまり付き合いのなかつた同期や元上司たちからは唐突に結婚したことに興味津

々と言つた様子であれこれと食いつかれ、同僚が『初恋の人と運命の再会をして云々』と答えるとなんの can のとはやされた。

『独身貴族を気取つていたお前が結婚とはなあ。嫁さんと仲良くしろよ。子どもはいいぞ』

と主役である上司に笑いかけられ、エルヴィンは「ええ。そのうちに……」と曖昧に笑んだ。

そんなやりとりを思い出しながらチーズケーキをかじる。フィリングの甘さは控えめで、レモンの酸味が爽やかだ。ざつくりとした歯ごたえの土台は少し塩味が利いていて、それが味のアクセントになっていた。よく味わつて飲み込み、紅茶に口を付ける。

ミルクティーには砂糖が入つていなかった。ケーキの甘さ考へてのことなのだろう。リヴァイは常にくつもの銘柄の茶葉を常備していて、そのときの気分や場面に合わせて最適と思う紅茶を淹れる。その細やかな気遣いは、今も昔も変わらない彼の長所だと思ふ。

「悪気がないのはわかつているが、どいつもこいつも俺が女性と結婚したものだとかばかり思い込んでるのがね、少し気に食わない」

「……まあそりや、普通はそう考へるんじゃないか。

お前、男と付き合つたことはなかつたんだろ」

大きなドーナツに苦戦しながら、小動物のように少しずつ食べているリヴァイが言った。

「確かに、俺は今も昔も基本は異性愛者ではある」
「だろ」

振り返って見ても、エルヴィンはごくストレートな性嗜好の持ち主だ。同性相手に欲を覚え、抱いたことがあるのはリヴァイの他にはいない。

もつとも過去においても今生においても、リヴァイと出会ってからは彼以外の人間とそういつた行為に及ぶこと自体が考えられなかつた。既存の価値観も何もかも反転するぐらいに惚れ込んでいるという証左なのだが、そのことを改めて言葉にして告げれば彼はどんな表情をするだろうか。

少し想像してみたが、恥ずかしがって逃げられる絵面しか思い浮かばなかつたのでこのまま黙っておくことにする。

「確かにお前は男だけれど、家事の腕は一流だし、下手な女性よりよほど『女子力』とやらは高いだろう。何よりこんなに可愛いのに……」

もぐもぐと小さな口でドーナツを頬張っているリヴァイの髪を撫でる。『可愛い』という言葉がお氣

に召さなかつたのか、きつく睨み付けられた。

「寝言は寝て言え」

ようやくドーナツを食べ終わったリヴァイが呆れたように吐き捨てた。手を洗おうと立ち上がった彼の右手を掴むと、よろめいた彼は困惑の眼差しをこちらに向けてくる。

細い人差し指の先に付いたグレーズを舌先で丁寧に舐め取ると、リヴァイはびくりと体を震わせた。さつと白い頬に赤みが差すのを上目遣いに眺めながら、他の指にも舌を這わせる。

「あ、や、めろっ……」

根元近くまでを口に含み、首を前後させて舌先とすぼめた唇でねぶってやるとリヴァイの表情が悩ましげなものに変わる。恥じらいと、快感の狭間で揺れている顔だ。別のものを啜えてやる行為を思い起こしているのだろう。

「なあ、やめろっば……」

力無い調子のリヴァイは、手を振りほどいて逃げるといった考えがすっかり頭から抜けてしまっているようだった。

「お前の言うとおり、遅い時間に甘いものを食べてしまったからな……そのぶん、消費しようか」

指から口を離し、耳元でそう囁くとリヴァイはますます真っ赤になった。

「んあつ、あ、やめろ……っ」

もがいた腕が水面に当たってばしゃん、と音を立てる。甘いバナラの香りがする、乳白色の飛沫が周囲に飛び散った。

「気持ちいいんだろう？」

入浴剤を溶かした湯は、少しとろりとした肌触りがする。後ろから抱き込み、足の間に座らせたリヴァイの肌をゆっくとまさぐると、そのつど押し殺した喘ぎがこぼれた。

ぴんと尖っている乳首を柔らかく押し潰すと、リヴァイは身を振って悶える。しつとりと濡れて淡い紅色に染まった首筋に顔を埋めると、強く香るのは甘いボディソープの香りだ。

「ほら、こんなになっっている」

腕を下に伸ばし、固くなっただけを主張しているペニスを握り込むとうう、とリヴァイが呻く。日頃、彼の嫌がることは極力しないと決めているがことセックスに関してだけは別だ。もちろん、本当に嫌が

らせるようなことはしないし、するつもりもない。だが、意地っ張りで恥じらいがちな彼は半分理性が飛ぶぐらいに蕩けさせてやらないと、素直に「いい」とは口にしてくれないので必然的に「いや」と言うのを無視する形になる。

右手でペニスを抜いて刺激し、左手で乳首を握ね回す。リヴァイの爪先が跳ね、ばしゃばしゃと水飛沫があがる。マンションを購入する際、自分が身を縮めなくても入れるという条件で選んだバスルームは広く、結果として男ふたりで睦み合っているも窮屈でないことにエルヴィンは過去の自分の判断を褒めてやりたいと思った。

「……っ、や、あつ……！ やめろ、風呂、汚れるからあ……っ」

濡れた髪を振り乱してリヴァイが叫ぶ。声音が随分と切羽詰まったものになっている。

「出そう？」

耳を真っ赤にしながらくくりと頷いた彼の体から手を離すと、ほっとしたように強張っていた体から力が抜けた。ふらりと浴槽を抜け出したその後を追って、もう一度後ろからすっばりと抱きしめる。

「あつ？」

「続きは、こつちで」

浴槽の縁の、広くなつた部分に腰掛けてリヴァイへの愛撫を再開する。ペニスの先端からとるとると溢れ出す雫を幹に塗り込めるように右手を動かし、左手で睾丸を優しく揉みしだく。

「い、あつ……や、ううっ……」

リヴァイはエルヴィンの腕に爪を立て、足を震わせている。右手の動きを早めると共に、首筋に軽く歯を立てるとリヴァイが身震いをした。

「ん、あ、あッ……！ あ……、出るっ！」

どくと手の内でペニスが脈打ち、勢いよく精液が溢れてエルヴィンの掌に叩きつけられる。はあ、と深い溜息を吐いたリヴァイが脱力してもたれかかってくる。エルヴィンは掌を洗い流し、労るようにリヴァイの額を撫でた。

「……お前はどうすんだよ、こんなに……しやぶるか？」

先ほどからリヴァイの尻に押しつける形になっていたエルヴィン自身のペニスもがちに固くなり、解放を求めている。

「いや、今日はいいいよ。その代わり……ここを貸してくれ」

細く引き締まった太ももを指でなぞる。その昔、調査兵団のリヴァイ兵士長は鋼の糸を撚り合わせたような、強靱な筋肉を身に纏っていた。今生の彼は戦士ではないので、戦うための体は持ち合わせていない。けれど、脂肪の少ないすらりと引きしまった体は少し痩せて衰えてしまった今でも十分に美しい。

「んっ……」

壁に手を付かせたりヴァイの太ももにボディソープを垂らし、閉じたその間にペニスを擦りつけるとじんと甘い痺れが走る。

「ああ……いいよ」

ゆっくりと、彼の中を探っているときの腰を使う。進めては戻し、動かすたびにねちゃっ、と粘ついた音がする。しなやかな筋肉の感触を味わいながら、段々と抜き差しを早めていく。

「んあつ……や、だめ……」

「ほら、ちゃんと足を閉じて」

ぺちん、と軽く尻を叩くとリヴァイが「あうっ」と小さく喘いだ。ずるずるとその場に崩れてしまいそうになるリヴァイの体を腰を掴んで支え、大きく腰を動かす。溢れ出した先走りポディソープが混じり合って泡立ち、ぐちゅぐちゅとはしたない水音

を立てる。

「いいよ、リヴァイ……もういきそうだな」

ずつ、と大きく突き込むと一気に熱が込み上げてくる。勢いよくペニスを引き抜いて、その刺激で射精した。飛び散った精液がリヴァイの尻にかかり、太ももへとどろりと流れていく。手で抜いて残った精液も掻きだし、太ももになすりつける。薄紅色に染まった肌が白濁で汚れているのがとてもいやらしく、興奮のまま上気したうなじに口づけた。

「気は……済んだかよ……」

気怠げな仕草で振り返ったリヴァイが、潤んだ目で見つめてくる。嗜虐心をそそのる表情にまたペニスが熱を持ってしまいそうになるのを、意志の力で押さえ込む。

「ああ。もう一度温まってから出よう」

シャワーで互いの体を綺麗に洗い流し、再び湯船につかる。あたたかな湯の温度と甘い香りが眠気を誘い、リヴァイはうつらうつらと船を漕いでいる。風呂から上がって髪を乾かしているあいだも、されるがままにとろんとした無防備な表情を晒した彼が愛しくて、抵抗されないのをいいことにベッドの上で何度もキスをした。

「おやすみ、リヴァイ」

そう告げればリヴァイはもごもごと不明瞭な答えを返して、すぐに穏やかな寝息を立て始める。かつてはとも考えられなかった光景だ。無防備に寝入ってしまうことを無意識のうちに恐れ、夜を共にしても必ず明け方には目覚めていた過去生のリヴァイとは違い、今の彼は神経の不調からくる不眠はあっても、眠ること自体を恐れる素振りはない。

安心したように眠る愛しい人の寝顔を眺めながら、エルヴィンも目を閉じた。抱きしめたリヴァイからはバナラの甘い香りがする。満ち足りた気分で眠る今夜は、きつと幸せな夢が見られる予感がした。

蜂蜜色の部屋

まったくもって、よろしくない傾向だ。

見慣れた天井を眺めながら、リヴァイは自答する。

「……ずいぶんと、上の空だな？」

どこか凄むような、低い囁きが耳に吹き込まれる。一瞬遅れて、ずんと深く突き上げる衝撃にリヴァイは目を見開いた。

「ひあ、あッ……！」

「その余裕をなくさせてやろう」

そう宣言したエルヴィンの瞳はぎらぎらと輝いている。まるで獲物を前にした猟犬か狼のようだ。彼の獲物であるところのリヴァイは、エルヴィンの凶悪なベニスでいたぶられている真つ最中だった。

「あつ、いや、だ……っ、そこ……うああっ！」

「いつもお前は嫌だとばかり言うな。たまには素直にいいと言ってみたらどうだ？」

ぱんっ、と肌がぶつかって乾いた音を立てる勢いで突き込まれる。一番感じるところばかりを執拗に責め立てられ、尻尻に自然と涙が浮かんだ。

「このっ……！」

せめてもの抵抗にときつく睨み付けるが、エルヴィンは意に介さず憎たらしいぐらゐの薄笑いを浮かべている。

「リヴァイ、すごいぞ。こんなにいやらしく絡みついてくる……」

ずるつと先端近くまで引き抜きながら、エルヴィンが感心とも揶揄ともつかない言葉を口にす。またすぐに奥まで貫かれ、リヴァイは喘ぎながらきつくシーツを握りしめる。汗で濡れた前髪が額に張り付いて鬱陶しかった。

「んああ……！ や、あ、あう……っ」

「ほら、ここが好きだろう？」

固い凶器のようなベニスで快感の在処を擦りたえられる。限界を超えた涙が勝手にぼろぼろと溢れて頬を伝い落ちていく。

「うああっ！」

喉元に噛み付かれてびくびくと体が震える。開かされたままの足の付け根が引き攣りそうだ。

「い……あ、あ……んう……も、いく……」

身を屈めたエルヴィンが顔を近づけてくる。思わずその首に腕を絡めて縋り付いた。もう一度強く突き上げられ、絶頂の吐息が合わせた唇の中で溶けて

消える。ぼたぼたと力無くペニスの先から精液が溢れ、腹の上に散らばった。

エルヴィンは低く呻いたが、彼のペニスは固さを保ったままだ。今夜は既に二度もリヴァイの中に吐き出しているというのに、一向に萎えないのにはいい加減にうんざりする。

ずるつと引き抜かれていく際に中が擦られ、リヴァイは小さく喘いだ。エルヴィンの吐き出したものや先走り、香油とが混じり合ったものがひと筋流れ出し、シーツに滴り落ちる。

「うあつ……てめえ、いい加減にっ……」

うつぶせに引つ繰り返され、尻だけを抱え上げられて再びエルヴィンが潜り込んできた。もはや腕に力の入らないリヴァイはシーツに突つ伏し、達したばかりの体に与えられるきつい快感に翻弄される。

「んあつ、うつ……これじゃ、まるで……あう……獣の、交尾じゃねえか……あ」

喘ぐ合間、切れ切れにそう声を上げれば背後で笑う気配がした。

「リヴァイ、以前に食欲と性欲は近いものだったのを覚えてるか？」

「……あ？ あつ、……覚えてる……っ、あ、人に

ものを、聞くっ……なら、少しは止めるよっ……！」
問いかげながらもエルヴィンは腰を動かすのを止めない。リヴァイの都合などおかまいなしだ。

「これは持論だが、飢えというのは人を獣に近づけるものだと思う。空腹のとき、気が立ったりするのに覚えがないか？」

答える気力も尽きてきた。リヴァイはうう、と呻いてシーツを握る手に力を込める。

「空腹が満たされることによつて、ようやく人は人らしく振る舞うことができるのだと……それと同じように、性交もまた人の中にある獣性をあからさまにする行為なのではないかと俺は思う」

「……うるっせえよ、このお喋り野郎……っ！ 人のケツにちんぼ突つ込みながらべらべら訳わからねえことばっかり言いやがって……いい加減、イケよこの遅漏っ！」

残った気力を総動員して身を起こし、睨み付けたがら叫んでやるとエルヴィンは一瞬呆気に取られた表情を浮かべ、次の瞬間には例の、人の悪い笑みを浮かべていた。

「言ったな。なら、そうさせてもらう」

「ひうつ……あ、ああッ！」

がつがつと容赦のない動きでエルヴィンが突き込んでくる。獣じみた唸り声は、彼も限界が近い証拠だろう。背中にエルヴィンの汗が落ち、リヴァイのそれと混じり合ってシートに流れていく。

「リヴァイ、出すぞ」

当然のように口にして、エルヴィンが強く腰を掴んだ。中でエルヴィンのペニスがぶるりと震える。

「ひあ、んんっ……あ、あ……ッ！」

奥深いところにどくどくと吐き出される。リヴァイもまた軽く達して、ぐったりと枕に顔を埋めた。

少しのあいだ、眠っていたらしい。どろどろに汚れていた体はいつの間にか綺麗に拭かれていた。もつとも、寝台のシートはそのままでふたりぶんの汗と体液で染みだらけ、ぐちゃぐちゃと大きな皺が寄っている。

「気が付いたか」

下だけを履いたエルヴィンが、寝台脇の椅子に腰掛けて何かを飲んでた。サイドテーブルには酒瓶らしきものと、何かの詰められたガラス瓶が置かれている。

「散々しつこくしゃがって……」

「元はといえばお前が煽ったせいだぞ」

しれつとうそぶいて、エルヴィンはもうひとつのグラスに液体を注ぎ、差し出してきた。ほんのりと黄みがかっていて、少しとろりとした粘り気がある。

灰かに甘い香りがするそれを口に含む。舌先に酒精の熱さを感じる。酒だ。

「この匂いはなんだ……蜂蜜か？」

「ああ。蜂蜜酒だ」

度数はそう高くはないのだろう。荒れた喉にもそれほど染みない。優しい、素朴な味がする。

「どうしたんだ、買ったのか？」

蜂蜜酒は、エルヴィンとこれまで飲んだことのあ
る酒の中には入っていないかった。

「貰ったんだよ。故郷の父親が倒れたというのでしばらく休暇を取った部下がいただろう？」

「ああ、いたな、そーいや。結局親父さんは大事はなかつたらしいが」

「彼の実家は農家で、蜂蜜も作っているそうだ。ご両親からの土産ということでこれをくれた。彼らには他意はないのだろう……」

ふふ、とエルヴィンがおかしそうに笑う。

「何がおかしい」

「その昔、蜂蜜酒が盛んに作られていた地方では、新婚家庭の嫁は一月ほど家に籠もり、蜂蜜酒を仕込んで夫に飲ませては子作りに励んだそうだ。蜂は多産の象徴とみなされていたらしい」

思わせぶりの視線を向けられ、リヴァイは寝台の隅に追いやられていた掛け布で身を隠した。

「エルヴィン……てめえ、それ以上言ったらもうお前とは寝ない、むしろ殺す」

「ひどいな……まだ何も言っていないぞ」

リヴァイがエルヴィンと関係を持つようになって、半年ほどが過ぎた。リヴァイの体は自分でも驚くぐらいの順応性の高さを発揮し、当初は苦しかった行為にもすつかり慣れてしまっていた。

問題は、そこにある。

調査兵团自慢の英雄であるところのリヴァイ兵士長が、上官であるエルヴィン・スミス団長に夜ごと尻穴を犯されて泣きながらよがっている、などという現状は由々しき自体に他ならない。

これがもしむりやり強要されたものだったのなら、まだ言い訳も立つ。だが、現実にはリヴァイは自ら

の意志でエルヴィンを受け入れてしまっていて、彼の性交で快楽を享受している。まったくもって、よろしくない傾向だった。

夜、人気のなくなつた兵团本部の団長執務室は人目をはばかる行為に耽るには格好の場所、現に今夜もこうやって仮眠室で乱れていたばかりだ。

しかも近頃はそれだけでなく、職務の合間の休憩時間に引きずり込まれたり、ひどいときは入り口の鍵を掛けただけでエルヴィンの椅子の上で慌ただしく抱かれたりすることもある。

ミケにはとつくに匂いでばれているだろうし、やたらと勘のいいハンジにも気取られているかもしれない。彼らは親しき仲にも礼儀を弁えていて、もともとごく私的なことに対して何かを言ってくることはないし、職務に差し支えが出ない限りふたりの関係についてとやかく言われることはないだろう。

だが、間違つても部下や他兵团の人間に気付かれることだけはあってはならない。そう思うのだが、近頃部下たちが『最近のリヴァイ兵長からはやたらと色気を感じる』などと話しているのを偶然聞いてしまつてひどく焦つた。

しかし、その原因であるエルヴィンは平然とした

もので、せめてもう少し回数を減らさないかというリヴァイの提案をすげなく一蹴した。

『自分からあからさまにするものではないが、なんら人に恥じることはないと思っているよ。それに、これは我々の中の意思疎通の一手段と言えるのだから職務と全く無関係というわけでもない。言うなれば、肉体を使つての会話だ。团长と兵士長が緊密な関係であることは兵団全体にとつても利点がある』

とんだ屁理屈もあつたものだが、堂々とそう言い切られてリヴァイはそれ以上の抵抗を諦めた。エルヴィン・スミスに口で勝とうというのは考えるだけ無駄なこと、というのは数年来の付き合いで嫌と言うほど身に染みている。

「リヴァイ」

不意に真剣な声音で名を呼ばれる。

「お前は俺の英雄、希望だ。そのお前を穢すような真似はしないし、誰にもさせない」

エルヴィンの表情に、不思議な既視感を覚えた。地下街ではよく見かけた、深い闇の淵を覗き込んだことのある人間の目をしている。

リヴァイはまだ、エルヴィンの過去を詳しくはしない。どういった家に生まれ、どんな環境で育つ

たのか。なぜ壁の外へ行きたいと思うのか――。

わからないことだらけだ。ただひとつ確実なのは、彼の語る言葉と、共に飲む紅茶と酒のうまさとで絆され、どうしようもないぐらいに惚れてしまったということだけ。近頃はそれに加えて体の相性の良さが加わってしまったているが。

「ああ……せいぜい、密やかに頼む」

「善処する」

薄く笑つて、エルヴィンがサイドテーブルに置かれたままだった瓶に手を掛けた。

「蜂蜜酒と一緒に、これももらつてね」

蓋を開けた中には、白い果実が蜂蜜の中に漬け込まれていた。エルヴィンは躊躇いなくその中に指を突っ込み、蜂蜜の滴る果実を摘まんだ。

「ほら、口を開けて」

寝台の上で何かを食べるのはリヴァイの意識に反するが、もう既に汚れてしまっているシーツの上なので気にしないことにした。

口を開け、エルヴィンの指ごと差し出された果実を口に含んだ。指先にまとわりついた蜂蜜を舌先で舐めてやると、エルヴィンが目を細めながら指を引き抜いた。

柔らかな果実は甘く、爽やかな香りがする。ごくりと喉を鳴らして飲み込む。

「桃か。うまいな、もつとくれ」

「ああ、いいよ」

親鳥に餌をもらう鳥の雛にでもなった気分です、甲斐甲斐しくエルヴィンが口元に運ぶ桃の実をいくつか食べた。

エルヴィンは残りの桃を自らの口に運び、「うまいな」と呟く。細かく崩れた果肉と、果汁と蜂蜜の混ざり合った甘い蜜だけになった瓶をテーブルに置き、もう一度蓋を閉める。

「空腹と性欲が人を獣に近づけ、腹と欲が満たされることで人らしさを取り戻せるのならば……今の俺とお前はようやく人心地ついたということになるな」
戸棚から新しいシーツと、リヴァイの着替えを取り出しながらエルヴィンが言う。

「さてリヴァイ、悪いが少しどいてくれ……シーツを取り替えよう」

リヴァイは素直に寝台から降り、床にべたべたと裸足の足音をさせて着替えを受け取る。エルヴィンが汚れたシーツを引き剥がし、新しいそれを張るのを手伝ってやる。

そのあとは、人らしく服を着て眠るのだ。